

2010年8月27日

／ 祭笛寅の舎弟の七味買う ／

都内の、とある下町の祭でした。

神社には神楽屋台があり、露店・夜店が並ぶ、懐かしい空間を、御神輿が威勢良く揺すられていきました。

／ スパッツの太腿滾る神輿ギャル ／

射的、水ぼんぼん釣り、金魚掬いも並んでいます。

昔は、干した八目鰻の店も出てましたが…。

／ 祭の灯四六五六の蝦蟇は何処 ／

調子の良い売り声に立ち止まると、そこは七色唐辛子の店で、声に合わせて、七色の薬味を升に調合しています。

口上をまくしたてる職人風の腹掛けつき前垂をした、その青年に、ふと、あの寅さんのイメージがかさなりました。あっ風天の寅さんの舎弟じゃないか…と、七味を買ってしまいました。

／ 赤とんぼじっとしたまま明日はどうする／ ～風天

…掲句は、その寅さんの一句。

いや、正しくいえば渥美風天さんの句。

風天が二百二十句ほどの句を残したことは、元新聞記者・森英介さんの取材で、08年に著書『風天』（大空出版）で伝えられました。

車寅次郎というキャラクターは、ご存じのごとく、滑稽味の底にペーソスを感じさせる人物です。

俳号は「風天」であっても、あのキャラクターを地にして、句をなしたのではないのです。彼は、有名人が集まる、幾つかの句会のメンバーになっていますが、残された作品群からは、寅さん→渥美清（芸名）→田所康雄（本名）を覗くことができま

す。

浅草でコメディアンになり、すぐに肺結核で入院・闘病をやむなくされ、数年間呻吟した彼の思いが、この一句に出ています。もっとも、その時期に詠まれたのではないようですが…。

／ 股ぐらに巻きこむ布団眠れぬ夜 ／ ～風天

／ うつり香の浴衣まるめてそのままに ／ ～風天

…寅さん映画の観客を楽しませたマドンナを思い出すもの良いでしょう。しかし、田所康雄の私生活は地味であったようです。

／ がばがばと音おそろしき鯉のぼり ／ ～風天

…これには、とくにユニークで滑稽なセンスを感じます。

／ お遍路が一行にゆく虹の中 ／ ～風天

…この句は、角川版の『日本大歳時記』に、著名俳人の句とともに収められています。その後『風天句集』というのも出ていたと聞きましたが、確かではありません。滑稽を主流として芸を貫いた人の、さりげなくにじみ出す詩情を楽しむのも良いでしょう。

／ 里神楽屋台の袖に口説く恋 ／

／ ひよっところにおかめいい寄る神楽笛 ／

…お祭りにお神楽は付きもの。でもこの頃は、トリオの漫才などもやってます。最後に風天の寅さんに敬意を表して、ゾッキ本などを並べたお店のおじさんに…

／ 地の暑さページにこもる啖呵売 ／